

ガラテヤ人への手紙4章1-11節 「進歩したのではなく、逆戻り」

**1A 奴隷から子の身分へ 1-7**

1B 後見人の下の子ども 1-3

2B 時が満ちての贖い 4-5

3B 御霊による保証 6-7

**2A 奴隷への後戻り 8-11**

1B 貧弱な、諸々の霊 8-10

2B 無駄になるかもしれない労苦 11

**本文**

ガラテヤ人への手紙4章を見ていきましょう。内容が豊富なので、4章を二つに分けたいと思います。今日は、1節から11節までを見ていきます。

**1A 奴隷から子の身分へ 1-7**

**1B 後見人の下の子ども 1-3**

<sup>1</sup>つまり、こういうことです。相続人は、全財産の持ち主なのに、子どもであるうちは奴隷と何も変わらず、<sup>2</sup>父が定めた日までは、後見人や管理人の下にあります。

これは、もちろん3章からの話の続きです。パウロは3章で、律法の中で生きる時を、「キリストに導く養育係」によって管理の下にいる子どもとして説明していました。律法の下で生きると、自分が罪人であることが明らかにされ、キリストが必要であることを悟ります。十字架につけられたキリストが、律法の要求する、律法の違反に対する死であることも知るようになります。このようにして、ローマ社会で、子どもを学校から送り迎えする養育係に例えていました。

しかし、今や信仰が現れた、つまり、キリストが現れて、律法に証しされ、また要求されていることがこの方であって満たされました。だから、今はキリストを信じる信仰が求められているのです。そして、今は、信仰によって、神の子どもになると言っています。ここの「子ども」とは、一定年齢に達した大人であり、父の相続を受け継ぐ資格のある人のことを指しています。そこでパウロは、再び、律法の下に生きる生活と信仰の生活を、一定年齢に達していない子どもの時の状態と、大人になった人との対比で説明しています。

ローマ社会の中には、少年は7歳になるまで幼児とみなされていたようです。そして17歳までは、小さな紫色の帯が服に巻かれるそうです。それが、彼がまだ子どもであることを示していました。そして17歳になると紫の帯のない服が与えられ、それで大人であることを証していました。

25 歳になってようやく、仕事に関わる法的な権利が与えられます。そしてユダヤ社会の中でも、バル・ミツパと呼ばれる成人式が 13 歳に行われます。それまでは、法的な権利がないのです。後見人や管理人の下にいます。それをパウロは、奴隷と何も変わらないと言っています。

人間社会の中にある、このような子どもから大人になる移行を、パウロは、「律法からキリストの現われる日」までの説明としています。神は、紀元前二千年頃にイスラエルの民にアブラハムの祝福の約束を与えられました。ですから相続人なのですが、しかし律法という後見人という監督の下に置いたのです。そして、時が来るまで、キリストが現れるまで、その状態にしておいたのです。

<sup>3</sup> 同じように私たちも、子どもであったときには、この世のもろもろの霊の下に奴隷となっていました。

ここの「もろもろの霊」は、新改訳の第二版ですと「幼稚な教え」と訳されていました。これは、どちらにも訳せるギリシア語です。今、パウロは、聖書にある、アブラハムへの約束と、その後に現れた律法との関係から、ガラテヤ人たちの異教の背景に話題を移しています。当時、ギリシアやローマの神話から始まる信仰は、とても素朴なものでした。はっきり言えば、幼稚なものでした。天にある万象がありますね。太陽や星があります。こういった、天上にあるものを、すべて神々と捉えていました。そして、これら神々が自分の運命を定めて、支配しているとみなしたのです。そして、こうした神々を怒らせてはいけないということで、様々な儀式を行っていました。それで、パウロは、「この世のもろもろの霊の下に奴隷となっていました」と言っているのです。人を、「きちんと仕えなければ、このような運命に定められる」とする恐れの中に閉じ込めていました。この正体は、この世にある諸霊であるということです。

私たちも、信じる前には、「これこれを行わなかったら、こういった悪いことが起こる。」という恐れによって縛られているところがあったと思います。すべての習慣が悪いものだとか、悪霊のものだとか、そういったことではありません。けれども、イエス・キリストの福音を信じて受け入れる、その時に、自分の内でもとてつもない恐れが出て来て、その恐れのために信じるのではなく、退いてしまうことがあります。先祖供養や、先祖の墓には、それがあります。

なぜか？その元を辿れば、江戸時代初期の、キリシタン撲滅を目指した、寺請制度、あるいは檀家制度です。1671 年に始まったと言われています。寺にすべての人を住民登録させます。どこの寺に属しているのか、檀家となります。強制的に仏教徒にさせられます。そうやって監視させられます。そして、キリシタンが家の中に一人もいないように、家単位で監視させていたのです。寺請制度が廃止されたのは、二百年後の 1871 年、今から約 150 年前です。ですから、今はそのような恐れは、全く持たなくていいはずなのです。ところが、今になってもその制度が、私も含む、日本人々の中に息づいています。自分の家族や親族の中に、キリスト者がいたら、他の人々はみな仏教徒なのに、どのように見られるのか？という恐れが出てきます。

そこで、真実に死者のことを悼むという思いはもちろんあるのですが、仏式の葬儀や先祖供養にまつわる儀式には、また別の力が働いていて、この制度を壊すようなことをしたら制裁が来るという恐れが働いているのです。その制度の中に生きていれば、全くその恐れは感じないでしょう。感じるのは、キリスト者になる時です。なぜ、そこまで恐れられるのかというと、そうした強い共同体の結びつきよりも、次元の異なる結びつきを、神の子どもとなるところで与えられているからです。江戸時代の当局が当時、キリシタンを恐れたのは、西欧諸国から侵略されるというのもあったでしょうが、ここまでの過酷な弾圧をしたのは、その強い神との結びつきを恐れたに他なりません。そのトラウマが、今に至るまで日本人の心に残っていて、キリストを信じるに至らないということが、多くあります。

## 2B 時が満ちての贖い 4-5

<sup>4</sup> しかし時が満ちて、神はご自分の御子を、女から生まれた者、律法の下にある者として遣わされました。

「時が満ちて」とパウロは言っています。満ちる、という言葉には、徐々に整えられて、ついにその時季に入ったというような意味合いがありますね。ローマにおいては、成人になった時、遺産を受け取ることに、精密な法的手順を行なったそうです。それで、自分の財産として実際に受け取ることができます。

その例えをつかって、パウロは、「時が満ちること」を論じます。主が世の救いのために定められた時が、御子を遣わされた時です。時はローマ時代、ローマがついに帝政に入った時です。それまでは、絶え間ない戦いが国々で繰り広げられ、後継者の戦いや内乱も経て、ついに、アウグストゥスが初代皇帝となって帝国が始まったのが紀元前 27 年でした。それから約 23 年後に、私たちの主がお生まれになったのです。紀元前 4 年頃だと言われています。そして、その時に住民登録をするべく、全世界の勅令をアウグストゥスが出しており、それでヨセフは身ごもっていたマリアを連れて、ベツレヘムに行きました。黙示録 12 章 4 節には、イスラエルが一人の女に喩えられ、男の子を産んだと書かれています。時が満ちて、メシアが生まれたのです。

ローマ帝国が始まって、「パクス・ロマーナ」と呼ばれる平和秩序がありました。それは力による秩序に他なりませんが、もう反抗する国々や民族もおらず、世界的な秩序と平和が広がっていました。そしてローマは、輸送や交通において画期的な発展を遂げています。「全ての道はローマに通じる」と言われているように、ローマ全体を網羅する整えられた街道があり、今も遺跡がたくさん残っています。それから、言語はラテン語というローマの言語がありましたが、その前のギリシア帝国で使われたギリシア語が定着して、ローマ時代にも一般にはギリシア語を使用していました。このギリシア語がとても精密な言語であり、単語の数も非常に多く、正確に物事を叙述できる特徴があります。その時に、イエスがキリストとして現れてくださり、使徒たちによって、当時知られてい

た世界、ローマの世界に広がっていったのです。まさに、時満ちて、なのです。

また、ダニエル書の預言にあるように、ローマ帝国は鉄の牙を持つ第四の獣のように、強権でありました。反逆罪に対しては、十字架刑という容赦ない極刑で臨みました。ユダヤ人はバビロンによって祖国を失ってから、エルサレムに帰還したものの、ずっと異邦人の支配を受けており、そこからの解放をメシアに求めていました。熱望していたと言ってもよいでしょう。ちょうどその時に、イエスが来られたのです。やはり、時満ちて、でありました。

そして、「御子を遣わす」という言葉はとても大事です。これは、神がご自分の子、神ご自身を宣教者として立てて、地上に宣教者として、使徒として遣わされたということでもあります。「私たちの告白する、使徒であり大祭司であるイエスのことを考えなさい。(ヘブル 3:1)」神と同じ身分である方が人となられたのですが、それは神という属性は全く捨てていないけれども、地上にいる人々と一つになることを示していました。「ヨハ 1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」とあります。イエス様こそが、宣教師のモデル、模範です。

そして、その中にいる人々を罪から贖い出し、ご自分のものとするために、神が遣わされたということでもあります。イエス様は、「ヨハ 20:21b 父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」と言われました。宣教師が外国に遣わされる時に、その国の文化や社会がありますが、キリストのゆえに自分の文化や社会を捨てて、あるいは横に置いて、それで現地の言葉、文化、社会の中に入ります。けれども、なおのことキリスト者として生きていき、それでキリストを自分の生活から、内側から出てくるものによって人々に紹介します。その地にキリストが生きておられるのですが、それを自分の内から証していくのです。例えば、中国内地に宣教したハドソン・テラーは、清王朝の時代、自らも辮髪(べんぱつ)という髪型をして、キリストの証しを立てました。

そして、「女から生まれた者、律法の下にある者として」遣わされたと言っています。「女から生まれた者」という言葉には、一種の弱さを含めた言い方であります。女が産みの苦しみをすることで、生身の人が生れます。そこには罪の現実があります。イエス様は、全ての、そうした肉体の弱さを身にまとわれてお生まれになり、十字架に付けられる時も、私たちと全く同じ肉体において付けられました。そしてこの言葉は、メシア預言、「女の子孫」も投影させていることでしょう。「創世 3:15 わたしは敵意を、おまえと女の間、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」処女マリアが、聖霊によってイエス様を身ごもりました。

そして大事なのが、「律法の下にある者」とあります。つまり、ユダヤ人として生まれたということです。イエス様は人としてはユダヤ人であり、ユダヤ人であることをやめられませんでしたし、ユダヤ教徒としても生きられました。ユダヤ教のラビであられ、当然ながら、そこにある慣習や律法にも従われました。律法学者らが受け継いできたききたり、神の戒めをむしろ違反するようなもの

であり、神の戒めを守るゆえに主は敢えて、彼らの解釈する安息日を破られました。神の律法自体を破られたのではなく、むしろ実質を無きものにしていたのは彼らのほうです。主は、ユダヤ人として律法を守っていました。ヨセフもマリアも、過越の祭りにはエルサレムに都上りをし、また主が生まれてから八日目には、イエス様に割礼を施し、律法の定める産後の清めの期間が終わってからは、初子を献げる律法に従って、イエス様をエルサレムに連れてきています。貧しかったので、鳩をいけにえとして献げています。このようにして、イエス様は決してユダヤ人であることをやめなかったし、律法の下にいる者として生まれ、地上での人生を全うされました。

これは、私たちが日本に生きることにしても同じです。キリスト者になったということは、キリストに付く者になったということです。新しい帰属が与えられ、それは先ほど申し上げたとおりです。けれども、神の愛のゆえに、キリストを知らせるために、同胞の民にも付くのです。寄り添うのです。

<sup>5</sup> それは、律法の下にある者を贖い出すためであり、私たちが子としての身分を受けるためでした。

贖いを主題として話は、ルツ記があります。貧しい人の土地を、近親者が代わって買い戻すのですが、大事なものは近親者であるということです。近い関係を持っているからこそ、その人を土地を売らなければいけない境遇から救い出す、贖い出すことができます。イエス様が女から生まれた者、律法の下にある者となられたのは、そのためです。人となられ、ユダヤ人となられたのです。彼らを贖い出されるためです。

そして、出エジプト記を思い出していただければよいでしょう。奴隷状態にあったイスラエル人を、神は力強い腕で、パロとエジプトに災いを下しながら、エジプトから連れ出しました。つまり私たち、罪の奴隷、死の恐怖の奴隷にいる者を、その縄目から解き放って解放して、ご自分の所有の民とするのです。私たちは、この贖いの力によって、今も敵の勢力、悪魔や悪霊どもから守られています。霊の戦いにおいて、神の盾があるのです。

そしてパウロは、「私たちが子としての身分を受けるためでした。」と言っています。午前礼拝で学んだことです。全ての目的は、私たちが後見人の下にいるような、奴隷と変わらない状況ではなく、十分に、神の約束された相続を楽しむことのできる「子としての身分」を得るためです。これを英語では adoption、つまり養子縁組ということです。私たちは、神と御子の関係の中に、養子縁組させていただき、それで神が御子に対して与えておられる特権や祝福、その選びや愛などを、私たちが神になることは決してないけれども、その分け前をいただくこととなります。

キリストが父なる神に選ばれたように、私たちもキリストにあつて選ばれ、イエス様が聖霊に満たされたように、私たちも聖霊に満たされ、イエス様が十字架に付けられ、死んで、葬られたけれども、私たちも罪に支配された古い人が死に、そして三日目に甦られました。私たちが新しい命



にあって生き、そして肉体の復活にも後にあずかります。そしてイエス様は天から戻って来られますが、私たちは引き上げられこの方に会い、そして地上に主は戻って来られますが、私たちもこの方と共に栄光の姿で戻ってきます。そしてキリストが神の国を統べ治められますが、私たちにも共同相続として、共に統べ治めます。この方が長子となってください、私たちはその神の家族の中に招き入れられたのです。

### 3B 御霊による保証 6-7

<sup>6</sup> そして、あなたがたが子であるので、神は「アバ、父よ」と叫ぶ御子の御霊を、私たちの心に遣わされました。

パウロは、子としての特権において、神を自分の慕う父としてあがめることのできる御霊が与えられたことを挙げています。「ロマ 8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と呼びます。」私たちが神から生まれた時に、御霊によって生まれましたね。イエス様が、ニコデモに御霊によって新たに生まれることを話したとおりです。

こうやって、この三位一体の神が関わっておられることに注目しましょう。父なる神がおられます。そして御子がおられますが、この方が父を知っておられます。その御子が、御霊を父のところから私たちに遣わしてくださいました。神が三位一体において、私たちに近づいてくださったのです。ゆえに、キリストが父なる神に対して持つておられる関係が、私たちに御霊によって与えられたということになります。

奴隷と息子の違いを、次のように対比することができます。息子は父と同じ性質を持っていますが、奴隷は持っていません。聖霊が与えられたことにより、キリストにある新しい性質、神の性質が与えられました。次に、息子は父を持っていますが、奴隷には主人しか与えられていません。ですから、親しい関係を示す「アバ、父」と言うことができます。ところでアバは、アラム語で「お父ちゃん」という意味です。ヘブル語も同じで、小さな子がお父さんのことをイスラエル人は「アバ」と呼んでいます。そのような親しみをもって呼ぶことのできる方となりました。イエス様は何度となく、ユダヤ人から、ご自身が神のことを「わたしの父」と言われたので、妬みを受けました。それはご自身を神と同一とされたということもありますが、それだけの親しさがあったので、妬まれたのでしょう。

そして息子は、父から愛されている事を知っているので、愛ゆえに父に従順に従います。けれども奴隷は主人を恐れ、従わなければ罰せられることを知っているのです。私たちの従順は、神の愛があってこそ、そこから出てくる従順です。そして最後に、奴隷は貧しいですが、息子は豊かです。これは放蕩息子の話を思い出すとよいでしょう、彼は財産の全てを使い尽くして、僕として父に雇ってほしいと申し出ました。しかし、父は恵みによって彼に息子の身分を回復させ、そ

れで祝宴を開きました。そしてもう一つの違いが次です。

<sup>7</sup>ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神による相続人です。

奴隷は相続がありませんが、息子にはあります。私たちはまだ、その相続の全てには預かっていませんが、主が戻られてから預かることができます。体の贖いがなされ、そして主と共に地上に戻ってくる時は栄光の姿で戻ってきて、そして御国にあずかります。私たちの歩みは、地上における歩みはとても地味なものです。しかし、これだけ霊的には恵まれているのだということを決して忘れてはいけません。

## **2A 奴隷への後戻り 8-11**

ここまでを話して、今、ガラテヤ人の信者が陥っている律法主義について、叱責を与えます。ガラテヤ人たちは、自分たちは進歩していると思っていたと思います。イエスを信じる信仰だけでは足りない。律法を守ることによって、完全な人になることができるのだ。ただ福音を信じて生きる、というのが幼い考えなのだ、ということです。けれども、実は、信じる前の状態に後戻りしているのだよ、ということをパウロは論じます。

## **1B 貧弱な、諸々の霊 8-10**

<sup>8</sup>あなたがたは、かつて神を知らなかったとき、本来神ではない神々の奴隷でした。<sup>9</sup>しかし、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうして弱くて貧弱な、もろもろの霊に逆戻りして、もう一度改めて奴隷になりたいと願うのですか。

ガラテヤ人たちは、以前、異教徒であった時に、様々な慣わしとしがらみの中に生きていました。それは、奴隷状態でした。しかし、神を知ることにより、そのような異教を捨て去りました。ここでパウロは注意深く、「神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに」と言っています。そうです、私たちが主体的に神を知ったという事実はあるはありますが、それよりも、主が私たちを初めから知っておられ、それで憐れんで選んでくださったのです。私たちが神を知っているよりも、神が私たちを知っておられます。これは大きな慰めです。そして、そのような異教のしきたりから自由にされました。キリストにあって自由にされました。

しかし、偽教師たちが彼らの教会に入り込み、モーセの律法を守らなければ救われないと教えたのです。その教えを受け入れて、彼らはさまざまな儀式を再び行ない始めました。それはあたかも、自分の霊を高めて、それで救いの完成へと導くもののように見せていますが、実は昔のしきたりと何ら変わらない、奴隷状態にするものなのだということです。前進しているのではなく、逆戻りしていることに気づかないのです。

ここで「弱くて貧弱な、もろもろの霊」と言っていますが、この背景には、キリストが行われたことが背景にあります。「コロ 2:13-14 背きのうちにあり、また肉の割礼がなく、死んだ者であったあなたがたを、神はキリストとともに生かしてくださいました。私たちのすべての背きを赦し、14 私たちに不利な、様々な規定で私たちを責め立てている債務証書を無効にし、それを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。15 そして、様々な支配と権威の武装を解除し、それらをキリストの凱旋の行列に捕虜として加えて、さらしものにされました。」ここにある、様々な支配と権威の武装、というのが、この世にある諸々の霊と関係があります。そうした慣わしや教えの中で、この世の霊が働いています。けれども、キリストが、罪の中で死んでいる私たちを生かしてくださいました。その中で、これらの支配や権威の武装を解除したと言われます。主が、諸外国を征服して凱旋の行列に並ぶ、将軍のように喩えているのです。そうしたしきたりや慣わしができなくなっていることを、主は、ご自身が死なれて罪を取り除き、よみがえらえて勝利を与えてくださったことによって、成し遂げられたのです。

<sup>10</sup> あなたがたは、いろいろな日、月、季節、年を守っています。

日は安息日のことです。月は新月のことでしょう。季節は、過越の祭りなど例祭と言われているものです。そして年は安息年やヨベルの年がありました。このようなものを今、あなたがたが守っているのは、あなたがたが昔、がんじがらめになっていた異教と何も変わらないのですよ、と言っています。

ここで大事なのは、これらのことを守ること自体は間違っただけではありません。ユダヤ人でイエス様を信じている人は、これらのものを、ゆるやかに守っている人々がいます。しかしそれは、キリストがなされた業を思い出すためであり、また、ユダヤ人社会に生きている中でつまずきを与えないということがあります。例えば、イスラエルで、主がよみがえられた日曜日に礼拝をすれば、もうすでに日曜日は仕事の日ですからね。土曜日が公休日です。しかし、これはイエス様の姿勢と同じように、愛によって行なうもの、福音のゆえに行なうものです。

けれども、これらを行なうことによって救いの足りないものを補おうとするならば、何らかの形で霊性を高められるものとして行なうならば、それは大きな間違いであるということです。ここで、実際に起こっていたのは、異教とユダヤ教の混淆です。異教の慣わしの中に、ユダヤ教で行われていたことと、表面的に似ているものがあります。例えば割礼です。儀式の中で、なんと男性が去勢を自ら行って、祭司となっていくという、むごたらしい儀式がありました。それと、男性器の包皮を切り取る割礼が似ています。だから、男性器をすべて取るのではなく、わずかに包皮を切り取るだけだからという誘いは、魅力的なのです。それほど違和感がないのです。

実は、イスラエルの民自身が、かつて陥った過ちなのです。主をあがめていると言いながら、周



困の民の慣わしを踏襲して、偶像礼拝をしていました。主に仕えると言いながら、エジプトの金の子牛にも仕えるといったように。金の子牛を拝んでいるのではない、それを通してヤハウエをあがめているのだ、という詭弁を使っていましたが、主は、「ヤロブアムの罪」として断罪されました。同じように、ガラテヤ人が律法主義に陥ることによって、従来の慣わしを混ぜ合わせ、諸々の霊に仕えてしまっているのです。

福音のみというものに、他のものを付け加えて救いを達成しようとする、この世の教えとの混ぜ合わせ、混淆が起こるだけであります。例えば、古代神道にキリストの道があるとすると、という教えがあります。初めは、日本の人たちに救われてほしいという願いから始まっているでしょう。けれども、変わるの相手ではなく、自分たちが神道の慣わしをしていくという逆戻りをしているだけなのです。実際に、そう信じて神道の儀式を行い始め、霊的におかしくなって、キリストの福音に立ち戻ったという人が知り合いにいます。

日本のキリスト教会には、アジア諸国に対してかつて日本軍が行ったことを謝罪するという運動がありました。福音を信じて生きるだけでなく、正義を体現しなければいけないと考えるのです。けれども、次第に、日本の民族そのものに悪の種があるという考えになっていきました。そして罪の呪いが、次世代にも受け継がれているとしたのです。これは、福音の根本を否定する教えです。人は悔い改め、信じれば、呪いから解放されているというものに反するのです。ご存じですか、今、騒がれている統一協会の教えは、韓国がアダムであり、日本がエバです。エバが蛇に惑わされた禁断の実を食べて、アダムがそれを食べたから、日本はその罪償いをしなければいけないと教えます。そして、日本はお金を韓国に出さなければいけない、と教えるのです。正義どころか、悪業を行っているのです。

福祉にしても、そういったものに福音に突き動かされて行っていく人々もいます。これはすばらしいことです。しかし、福音の中に、福祉を混ぜ合わせることをしたら、福音がもっと良いものになっていくのではなくて、自分が福音を捨てていくだけになります。福祉関係をよく知っている人であれば、そこにも人の罪ゆえの闇があることを知っています。政治にもあります。信じるだけでなく、他のこともしなければいけない、という流れは、福音をよくするのではなく、自分が単純に、福音の力から外れ、世的になっていく、つまり世の諸霊に従っていただけとなるのです。

## 2B 無駄になるかもしれない労苦 11

<sup>11</sup> 私は、あなたがたのために労したことが無駄になったのではないかと、あなたがたのことを心配しています。

パウロは、自分が福音をガラテヤの地域に宣べ伝えたのにもかかわらず、彼らが異なる福音を受け入れてしまったことで衝撃を受けています。彼らは、ほとんど神を捨て去ってしまい、ほとんど

キリストを捨ててしまったのです。信者であったところから、ほとんど不信者になってしまったのだろうか？と。台無しになる時は、瞬間にそうなりますね。育てるのは時間がかかります。手間がかかります。労苦が伴います。しかし、何かに引っかかれば瞬間に台無しになります。そこで後でパウロは、「産みの苦しみを再びしなければいけない」ということを話します。

私たちは、「もうちょっと付け足していいだろう」と思います。けれども、その付け足しが、信じる前の逆戻りをさせてしまっているということなのです。福音にある神の恵みにしっかりと立っていきましょう。